特集 一人ひとりが主役
YWCAフェスタ in 長崎―全国集会

The Young Women's Christian Association
YWCA

日本YWCAの使命(ミッション)
イエス・キリストに学び、共に生きる世界を実現する
世界の人々と共に人権・平和・環境の問題に取り組む

第30総会期主題
平和を実現する人々は幸いであるーマタイによる福音書5章9節

日本YWCAビジョン2015
(1)非核・非暴力による平和を構築する
・平和憲法をまもり、世界に広める
・市民レベルで東北アジアの信頼関係を築く
・女性と子どもの権利をまもる
・パレスチナYWCAの活動を支援する
(2)若い女性のリーダーシップを養成する

2
FEBRUARY 2012
No.706
www.ywca.or.jp

特集
Special Issue

YWCAフェスタ in 長崎―全国会員集会

開催 日時：2011年11月26日(土)～27日(日)
会場：活水女子大学(長崎市)

テーマ 女性が創りだす安全な世界
Women Creating a Safe World

会場の活水女子大学は長崎YWCA発祥の地

全国から10代から80代までの220余人が参加し、ニャラザイ・グンボンズバンダ世界YWCA総幹事を招いて開催したこの集会は、各世代のリーダーシップが発揮され、また長崎から福島・沖縄へとつなげ、「核」否定と脱原発への想いを新たにする機会となりました。(3ページより報告掲載)

「希望への道のり」

落合恵子

新しい年を迎えても、一向に心に弾みがつかない。連帯への絶え間ない意志の力はむろん大事だが、あまりに絆だ、復興だ、とメディアに大声で言われると、懐疑的にならざるを得ない私がいる。東京電力福島第一原発の過酷事故に関する限り、いわゆる精神論に流れてはいけないのではないか、と。

過去の歴史をひも解いても、精神論がばっこする時代は戦時中を例にあげるまでもなく、市民は決して幸福ではなかった。

師走に、この国の首相は原発事故の「収束」を宣言した。ベトナムやトルコなどへの原発輸出も考えているという。武器輸出三原則も緩和される。

作家。「クレヨンハウス」主宰。新刊に『積極的その日暮らし』(朝日新聞社)、『「孤独の力」を抱きしめて』(小学館)

一体、どの時代に、どの社会に、どの国に、私たちは生きているのだろう。ドイツやイタリア等では民意によって原発依存社会から抜け出ることを決意した。他国の原発事故を受けて、終止符を打つ意志を明確にしたのだ。他国の市民に脱原発への背を押した当事国は、過酷事故への真相究明も未だという状態のまま、早々に「収束」だというのだ。

いったい何をして「収束」と呼ぶのか。福島の人たちの現在、そしてこれからもずっと続くであろう苦悩や不安や無念さや憤りは、このまま置き去りにされるのか。そうしてこの国は「まるで原発事故などなかったような」日常に戻ろうというのか。

友人を通して届いた福島の女子高生の叫びがここにある。少々乱暴な言葉を使ってはいるが、彼女の叫びの底にある、どうしようもない苛立ちは理解できる。

「そんなに原発が安全だという

のなら、またやりたいのなら、東京のどこか、お台場にでもつくりゃあいいじゃないか！　大人なんて、もう信じない。私は原発あるところで脱原発の運動をやっている人しか信用しない」。

原発のない東京で、「さようなら原発」のアクションをしている大人の一人には実に痛い言葉だ。たぶん彼女にとっては、テレビで見るお台場こそが、福島でつくられる電気を使ってきた東京の象徴であるに違いない。

●

チェルノブイリ原発事故の後、主宰する子どもの本の専門店や女性の本の専門店クレヨンハウスでは、原発や新しいエネルギーのあり方について、高木仁三郎さんたちを講師にお迎えし、学習会を重ねてきた。反原発（当時は、この呼称だった）の本を集めて書店の書棚に並べ、デモにも参加した。

しかし、ある時から（いつからだったか）、緩みが生じていたこと、そして年を経るにつれて、さらに私の内側で緩んでいったことを認めざるを得ない。

しかし、沖縄の基地問題も、憲法も、その他もろもろのテーマも、むろん原発もすべては地下水脈でつながっている。その一つひとつに対応するのが、めいっぱいだった、というのは言い訳でしかない。

福島でつくられる電気を使ってきた私たちが、先の大戦と同じように「一億総ざんげ」をすればすむものなのか。政府の呼びかけに応じて節電に努めれば、それでいいのか。節電は大事だが、そういった「一億総ざんげ」が原発暴走に幕引きをすることにならないか。市民の後ろめたさと善意から生まれる「ざんげ」は、真相解明に蓋をすることに有効でしかない。責任の所在をあいまいにするだけだ。

問われるべきは、どこなのか。悔い改めるべきなのは何なのか。私はしっかりと見据えていきたい。

２０１１年の１月末、ある雑誌に私は新しいエネルギーのあり方について寄稿した。それが雑誌として刊行されたのは、４月になってからだったのだが。

その原稿の中で私は、何人かの女性を紹介した。一人は、アメリカ人のダイアン・モントーヤさん。ネイティブ・アメリカンを先祖に持つ彼女は、「七世代先の子どもたち」というテーマを、私に突きつけてくれた。

…私たちは、先祖から、何か重大な決定をするとき、大事なことを選ばなければならないとき、次のことを大事にするように言われてきました。それが現在から見た時、どんなに便利で合理的に見えようと、七世代先の子どもに迷惑をかけるようなことは決して選んではならない…。

記憶で書いているので、一字一句過不足なく再現できているかは自信はないが、いま必要な視点であり姿勢ではないか。

一度持ってしまった原発がつくりだす「核のゴミ」を処理する方法を、人類は未だ手にしていない。それ一つをとっただけで、ＮＯＮＵＫＥである。

私たちは自らの感受性と論理性を駆使し、真に安全で安心のできる社会・時代に向けて、再びの「はじめの一歩」を踏み出さなければならない。市民が柔らかくつながり、声をあげ続けなければ。それがいま子どもを生きている人、これから生まれてくる無垢のいのちへの、私たち大人からのあがないの一歩だと、私は信じている。

教えることは希望を語ること

西村由紀子

昨年11月の大阪Ｗ選挙で、「大阪維新の会」の橋下徹氏が大阪市長に、松井一郎氏が大阪府知事に選出されました。開票から数分で「当確」が出るほどの圧勝に、２人共、民意は自分たちの味方であると自負しています。

私が最も危惧しているのは、「君が代」強制条例や、職員処分条例を制定した、自称「良い独裁者」の橋下氏が、「大阪府教育基本条例案」を通そうとしていることです。戦後、日本の教育は、「政治と教育が一体化して国を無謀な戦争へと駆り立てた」という深い反省から、「教育の政治的中立」を大原則としてきました。しかし、この条例案では、知事が決めた教育目標には強制力があり、校長や教員はそれに従わなければならないことになっています。

大学の教育原理の授業で、ある教授が「教えるとは希望を語ること」と板書しました。教師を目指していた私は、「良い教師とは、どんな生徒とでも希望を語りあえる教師だ」と、その言葉を大切にしてきました。

私がこの言葉の生まれた時代背景を知ったのは、つい先日です。これは、フランスのレジスタンス詩人ルイ・アラゴンが、１９４３年、ナチスの戦火を逃れてフランスの中部に疎開していたストラスブール大学で、数百名の教授と学生がナチスに銃殺・逮捕された事件を題材に書いた「ストラスブールの歌」という詩の一節でした。この詩には、教育の理想だけではなく、教育を支配した「独裁者」ヒトラーへの怒りが込められていたのです。

政治が教育に介入しようとしている今、私たちは、どんな小さな動きも見逃さず「ＮＯ」と発信しなければなりません。私たちの沈黙は、独裁者には「ＹＥＳ」になってしまうからです。

（大阪ＹＷＣＡ会員）

Special Issue 特集 Women Creating a Safe World

一人ひとりが主役！

全国会員集会

YWCAフェスタ in 長崎

報告

晩秋とは思えないほど暖かな天候に恵まれた11月26日(土)～27日(日)、活水女子大学に、220余名が集い、18年ぶりの全国会員集会が開かれた。

荘厳なハンドベルの調べによって始まった「ようこそ長崎へ」に続いて、世界YWCA総幹事ニャラザイ・グンボンズバンダさんの講演は、高校生から80代までの参加者を覚えて、特にインタージェネレーション（世代間）の協働の大切さを話された（次面に講演要旨掲載）。その日の夜の交流会「長崎ピースナイト」は、おいしい夕食をいただきながら台湾YWCAの3名の方のダンス、長崎ぶらぶら節などを全員で歌い踊った楽しい夜となった。

2日目には、多様なテーマと手法で次の7つの分科会を実施。「Let's Try！ピースサイレントアピール～全ての世代で実行可能！あなたにもできる 平和のアピール～」（福岡YWCA平和グループ）、「怪獣ゲンパツドン」（神戸YWCA平和活動部）、「DV被害をうけた女性と子どもの包括的支援の実際～大阪YWCAの場合～」（大阪YWCA女性エンパワメント部）、「多文化共生ワークショップ～サンチャゴくん、なんで？～」（大阪YWCA国際部委員会 開発教育研究会）、「平和の継承～若者・高校生たちの声をきこう～」（活水高校YWCA／活水高校平和学習部／長崎YWCA）、「アートで街づくりスタディツアーinケニア／の実現に向けて」（京都YWCA）、「いのちをつなぐデモクラシー『女性に対する性暴力』～沖縄の声を聞いて～」（日本YWCA ビジョン2015推進委員会）。分科会の成果を共有した「全体会」など盛りだくさんのプログラムを通し、YWCAの持つ力を再確認した2日間であった。

参加者一人ひとりの心とパワーが寄り集まったからこそ大きな実を結ぶことができたことに、この場をお借りし感謝を申し上げたい。

全国会員集会実行委員長　手島千景

200人もの「長崎ぶらぶら節」踊りは壮観！

分科会で作ったグッズを持ってオランダ坂で平和のアピール

被爆地長崎での開催を終えて

「YWCAフェスタin長崎」に参加された皆様、開催へのご協力・激励してくださった方々、全国会員集会が無事終了できましたことを、地元長崎YWCAとして心から感謝しお礼を申し上げます。

開催地が長崎となり、熊本・福岡・長崎各YWCAの実行委員が2010年の9月に出会い、まず「女性が創りだす安全な世界」をテーマに「YWCAフェスタin長崎」としてのプログラム内容を検討し諸準備を進めました。経費節減もあり現地での委員会は3回で、その他は長崎の担当者で、会場・実施準備関係を日本YWCAと連絡調整して進行させました。

久々の地域YWCAでの集会が、楽しく出会い・語り・学んで・パワーアップし元気を得るためには「長崎らしい」企画をと考えました。会場には、長崎YWCA発祥の地であり、132年の歴史ある活水女子大学をお借りしました。オプショナルツアーは被爆地や殉教地めぐり、加害責任を問う資料館見学などを計画。

開会は、ハンドベルで静かにオープン、被爆証言・高校生平和大使のメッセージ、など。アドベント聖日礼拝にはパイプオルガンでの賛美を計画。また「核」否定の思想に立つ日本YWCAとしては、原発事故の現況に関する福島YWCAからの声と日本YWCA被災者支援活動報告を入れ、「いのちの尊厳」を共有し「核と人類は共存できない」ことを学び合うことを計画し、準備してきました。

集会後、世界YWCA総幹事のニャラザイ・グンボンズバンダさんは被爆地長崎の市長を表敬訪問されました。期待の彼女の講演はパワーに満ち、世界YWCAの課題を明確に打ち出されたことは、この全国会員集会が一層充実できましたことを、重ねて感謝いたします。

長崎YWCA会長　熊江雅子

特集 Special Issue

YWCAフェスタ in 長崎

全国会員集会開催

基調講演要旨

安全な世界を創る女性たち

ニャラザイ・グンボンズバンダ
世界YWCA 総幹事

長崎での日本YWCA全国会員集会に参加する機会をいただき深く感謝します。総幹事就任後すぐにジュネーブに高校生平和大使をお迎えし、今回来日前に『長崎の鐘』（永井隆著）を何度も読み、実際にその足跡をたどり、長崎の苦難の歴史や精神・平和への祈りに触れ、深い共感を覚えています。クリスマスを待つ待降節が始まるこのとき、特に広島、長崎、そして東日本大震災、福島原発事故の痛みを覚えて、核のない平和な世界、隣人愛が満ちる世界の実現のために力を尽くしていくことができるようにと祈ります。今日私はさらに世界YWCAの声として、世界平和実現のために戦略的にもすぐれた働きをしている憲法9条を日本政府に尊重し守るよう訴えます。日本YWCAが姉妹YWCA、特にパレスチナYWCAに示している国際的連帯と協働にも感謝します。また、アジア地域の姉妹YWCAとこの地域における課題を取り上げ、継続して関わり、知恵と力を共有し、つながりをつくり出していることにも敬意を払います。歴史の過ちに対する謝罪のメッセージにとても深い感銘を受けました。女性への暴力、子どものケア、教育など他の多くのプログラムも素晴らしいと思います。世界YWCA運動が隣人を愛し分かち合いながら、私たちが住む世界に変化をもたらしていく活動であること、地域に深く根差しながら国際的にも広がりを持つ運動であることを、実践を通して示していきましょう。

今世界は岐路に立っています。経済危機や紛争、災害等がもたらす貧困・不公正・暴力・HIVとAIDS等によって健康に生きる権利と機会を奪われ苦しんでいる多くの女性や少女たちがいます。2011年世界YWCAは、国際女性サミットおよび総会で「女性が創りだす安全な世界」のビジョンを掲げ、10年間の行動計画を呼びかけました。実現のためには女性のリーダーシップとエンパワメント、権利促進が不可欠です。また社会における男女のリーダーシップを対等に分かち合い、ジェンダー平等に根差した関係を築くための質の良い教育投資をすることが重要です。若者の性と生殖に関する健康と権利の保障、政治・社会・経済組織のすべてのレベルの決議機関への女性の公正な参画、女性たちの平和構築・紛争解決・再建のプロセスへの参画、世代間の役割分担と協働、女性への暴力根絶へのあらゆる可能な取り組み、若年結婚防止対策、適切な性教育と家族計画支援、HIV問題対策、偏見と差別をなくす教育、若い女性たちのリーダーシップを養成する場の提供など、世界YWCAは他団体とのパートナーシップを強めながら、長期ビジョンに基づく運動に総力を挙げていきます。

40年以上前、私はジンバブエの片田舎で、貧しいクリスチャンファミリーの11人家族の子どもとして生まれました。

世界での運動に持ち帰ります

全体会でのメッセージ

まず、この2日間で覚えた日本語について話したいと思います。「愛」という言葉を学びました。日本に到着してから、たくさんの愛を感じました。「平和」という言葉を覚えました。ドメスティック・バイオレンスへの取り組みから考える家族の中の平和、私たちの街やコミュニティでの平和、そして世界の平和があります。これから私にとって「平和」という日本語は、常に日本YWCAとつながるものになるでしょう。「女性」という言葉を学びました。これは、多様な年齢・考え方・経験・知識を持ちながら、幸せや人間らしさを求める同じ情熱で結びつけられている、私たち皆を指す言葉です。「ありがとう」という日本語は来る前から知っていました。しかし、私の「ありがとう」という気持ち、今どんなに謙虚な気持ちになっているかは、自分の母語で「Tinotenda」と言うしかないと思います。

今日の分科会で取り上げられた課題は、世界YWCAに持ち帰ります。まず、世界YWCA運動として、日本YWCAの、平和のための非常に重要な取り組み、特に長崎を原爆が落とされる最後の場所にするための運動を支えるべきだし、支えていくということ。2つめは、憲法9条を守らなくてはならないということ。3つめは、沖縄における米軍の問題は、沖縄の人々だけの問題ではなく世界平和の問題だということです。皆さんは、大胆に、明確に、謙虚に、しかし自信を持って、これらの課題を取り上げられました。世界YWCAとして私たちは、軍縮・各国の軍事化に対する取り組み、世界平和の問題に関して、皆さんと連帯し支えなければならないということを、今回の会議への支援として持ち帰ります。

（翻訳・小笠原純恵）

ニャラザイ・グンボンズバンダ　ジンバブエ出身で、人権弁護士として20年以上にわたり、危機的状況下にある国々の女性と子どもの人権に関わる問題に取り組んできた。国連女性開発基金（UNIFEM）・国連児童基金（UNICEF）など10年以上にわたり国連に勤務。2007年世界YWCA総幹事就任。多くの著作を出版、詩作をたしなむ。2児の母親でもある。

日本への愛と友好の旅

長崎で開催された日本YWCAの全国会員集会に、台湾YWCAとして参加することができたことを光栄に思います。

ニャラザイ・グンボンズバンダ世界YWCA総幹事は、女性のエンパワメントがYWCAの大切にしていることの一つであると指摘されました。世界中のYWCAにはすばらしいリーダーがたくさんいますが、私たちが直面している重大な課題は、もっと多くの若い人たちが参加するようにすることです。この点、今回の集会でさまざまな世代の人たちが発言されたこと、また特に、高校生平和大使や日韓ユース・カンファレンスの活動を通して、若い人たちが社会に影響を与えている様子を見て、感銘を受けました。また、分科会や協議の中で、日本YWCAの主要な活動についてさらに深く知ることができました。加えて、何人かの方々と一緒にニャラザイさんと直接膝を交え議論したり、気持ちを伝え合って交流することができたことに感動しました。「長崎ピースナイト」で長崎YWCAの会長さんがリードされた美しい踊りと皆さんの歌声は、私たちにとっていつまでも大切な思い出であり続けるでしょう。

皆さん、私たちを温かく受け入れ、親しく接してくださってありがとうございます。また、会員集会後に訪問を受け入れてくださった京都と大阪のYWCAにお礼を申し上げます。台湾と日本のYWCAの間に、近い将来さらに多くの交流があるといいと思います。一緒に、女性のための安全な世界を創りましょう！

台湾YWCA　グレース・シー、チンリー・ツァイ、フンファ・チェン

（翻訳・小笠原純恵）

祈り

た。父は私が3歳の時に病気で亡くなり、その時27歳だった母が働いて子どもたちを学校に通わせてくれました。そんな私が、いつの日か一人の証言者となること、リーダーとなること、人間のよき成長のために、分かち合いと連帯の精神を広げるために声を上げるものになることなど思ってもみませんでした。あなたが信じていること、仕事、賜物、あなたの霊性、希望もまた、世界中の多くの女性たちや少女たち、その家族たちにとって意味をもたらすものであり続けていることを、私は自分の経験を通して断言いたします。

（翻訳・俵恭子）

＊講演全文は、報告書に掲載しています。報告書に関するお問い合わせは日本YWCAまで。

11月28日には田上富久長崎市長を表敬訪問

最高齢参加者の長崎YWCA会員の中野洋子さんと

3・11以降を、共に生き続けるために祈ります。私たちが、引き裂かれることがありませんように。一人ひとりは違っていいのだと認め、尊重し合う関係が築けますように。そして、自らを変革する勇気を与えてください。私たちが、共に生き続けるために祈ります。

主から創られたはずの私たちが、人間の力を過信し、大きな力に依存し続けてきたために、人間らしく生きる大切なものを手放してきてしまいました。ヒロシマ・ナガサキから学び、誤った文明の行き着く先をみて、核と人間は共存できないと「核」否定を言い続けてきた日本YWCAは、間違っていなかったと確信しますが、しかし、足りないこと・及ばないことがあった今までを悔い改めて新たな歩みを進めていきましょう。

東日本大震災の大地震・大津波、そして原子力発電所の事故は、多くの犠牲とあらゆる分断を生み出し続けています。特に原発事故による放射性物質は、福島をはじめ全国・全世界にばら撒かれ、私たちはヒバクされ続けています。

福島は美しいところです。初めて訪れても故郷のように思える景色が広がります…「東に紺碧の太平洋を臨む浜通り。桃・なし・りんごと果物の宝庫中通り。猪苗代湖と磐梯山のまわりには金色の稲穂が揺れる会津平野。その向こうを深い山々が縁どっています。山は青く、水は清らかな私たちの故郷です…」。（＊これは、「9・19さようなら原発5万人集会」でのハイロアクション福島の武藤類子さんの言葉です。）

故郷を離れることを余儀なくされる多くの人々―子どもを連れて避難する母親と福島で仕事しなければならない父親、孫と祖父母も遠く散り散りになり、家族は離れ離れです。核は、コミュニティを引き裂き、家族を引き裂き、人々の普通の暮らし、当たり前の生活やつながりを引き裂いています。8カ月経過しても未だ収束しない原発事故は、引き裂かれる痛みと悲しみをより深くしています。（中略）

私たちが出来ることには限りがありますが、できるだけのことをしたいと思います。今すべきは原発を止めることと被災されている人々に寄り添うこと。今ここから、いのちを大切に選ぶ一歩を踏み出したいと願います。主によってつくられたすべてのいのちを大切に、原発と核兵器のない地球を子どもの子どもの、そのまた子どもたちへとつなぐことが出来ますように。主は私たち一人ひとりを愛してくださっています。その価値ある一人の人間として、自ら考えて決断していけるように励ましてください。希望を持って、まわりの人々とつながりながら、前へ進めますように。

3・11以降を、共に生き続けるために祈ります。私たちがこれ以上、引き裂かれることがありませんように。一人ひとりは違っていいのだと認め、尊重し合う関係が築けますように。そして、自らを変革する勇気を与えてください。世界中の人々が共に希望を持ってこれからを生き続けるために祈ります。

横山由美子
（日本YWCA運営委員／新潟YWCA会員）

2011年11月27日
「YWCAフェスタ-in長崎―全国会員集会」閉会にて

特集 Special Issue

YWCA フェスタ in 長崎

全国会員集会開催

「微力だけど無力じゃない」と題した三河悠希子さん（活水中学校・高等学校宗教主任）の日曜礼拝メッセージ

26日午前中のオプショナルツアーは、「被爆地めぐり」と「日韓・日中の歴史」の2コース

台湾YWCAから3名が参加

参加者の声

微力だけど無力じゃない！

つながっている！

オプショナルツアーから始まった長崎での会員集会は、多くの出会いと多くの学びを与えてくれました。私は日韓・日中の歴史コースに参加し、戦争中に日本という国が行った残虐な行為を目の当たりにし、心が引き裂かれそうでした。私を含め、若者は過去を学び、心で感じ、しっかりと考えて未来を創ることが必要だと思いました。

活水女子大学に場所を移してからは、たくさんの方々の貴重なお話を聞くことができました。始まりを告げるハンドベルの音色にはうっとりしました。ニャラザイ・グンボンズバンダ世界YWCA総幹事のお話はスケールが大きかったですが、心に響くものばかりでした。「Think globally, act locally（地球規模で考え、地域に根差して活動する）」という言葉があるように、私は私の地域ＹＷＣＡでしっかり自分のできることをしていきたいと思えるお話でした。

その後の「ニャラザイさんを囲む会」へ参加したい気持ちを抑えつつ、私は2011年8月末から行われた日韓ユース・カンファレンスのファンドレイジングのために報告書と美容パックの販売に精を出しました。そして、交流会の時間にはカンファレンスの報告をさせていただきました。もう遠い昔のように感じられる日韓ユース・カンファレンスでしたが、やはりつながっている！と感じました。私たちYWCAの活動は世界中に広がっていて、パッと見るとまったく違う活動のように見える時もありますが、すべては世界が平和になることのため、人々がこの有限な地球と人々の持つ無限の可能性の中で、平和に生きることを目指した活動であること、それを改めて感じました。

日曜礼拝は、あまり聖書を学んだことのない私にとって、とても新鮮であり、学びの多いものでした。自分が勇気を出し動くこと、すると、小さいながらも流れができたり、風向きが変わったりするのかもしれない。いくら絶望的に見えても、絶望よりは希望の方がいいなぁ、そんなことを静かに考えられる時間でした。

戦争と平和を考え、多くの会員の方と出会い、優しさと行動力に感化される時間でした。

大阪YWCA　中村 舞

私にできること

東京電力福島原発の事故もあり、改めて「核」の問題と向き合っている時だったので、釧路YWCAからは４名で参加しました。活水学院は私の母校で、卒業後初めて訪れた懐かしいチャペルでの礼拝は、50年の歳月を一瞬にして学生時代に戻してくれました。

開会式の時に“高校生平和大使の報告”を聞き、分科会では高校生平和大使の塩野真希さんからさらに詳しく、高校生だけで署名を1万人分集めることから始めて、今では6万～９万人分を集めて毎年8月にスイスのジュネーブの国連軍縮会議事務局を訪れ署名を提出し、世界平和のため核廃絶のスピーチを英語でしていることを聞きました。この若者たちをサポートし送り出しているのはシニアの方々であることを聞いて、今の私にできることとして、学童児童館で紙芝居を演じていますが、８月には必ず戦争や原爆を題材の紙芝居を選び伝えることをこれからも続けようと改めて思いました。「微力だけど無力じゃない！」

釧路YWCA　冨安邦子

原発事故を見つめ直す

私は今回、YWCAフェスタin長崎に参加して、ニャラザイさんの講演や日韓ユース・カンファレンスの報告などから、今まで目を向けたことのなかった世界の現状を学ぶことができました。そして、原発事故について改めて見つめ直すことができました。特に印象に残っているのは福島県の実情を聞いている時の会員の方々の表情です。自分の悲しみのように感じてくださっている様子を間近に見て、共に痛みを感じてくれている方が全国にこんなにもいらっしゃるということに感動と感謝の気持ちで胸がいっぱいでした。福島から来た私たちを温かな心で出迎えてくださったYWCAの皆さまに本当に心から感謝しています。福島原発のような事故がもう２度と起きてはならないし、私たちのような思いはだれにもしてほしくありません。今後、原発事故を体験している福島県だから描ける未来・安全な世界について福島から発信していかなければならないと感じています。

福島YWCA　半澤紗也子

暮らしと生き方を選びとれる社会へ

大都市東京に住む私が、なにげなく電気のスイッチを押すその向こうに、大量の放射能に晒されながら原発に立ち向かう人たちの姿が、そして福島の人たちの顔が、思い浮かぶようになったのは3.11以降のこと。子どもたちが安心して「うちのごはん」を食べ、泥んこになって遊ぶということが当たり前ではなくなったこの状況になって初めて、私が原発という差別と犠牲の構造上に生活してきたことを思い知らされました。

●

「原発の上に成り立つ生活をしたくない。原発に代わるエネルギーを選ぶために自分で出来ることがしたい」その思いが強くても知識のほとんどない私は、まず『マンガでわかるエネルギーのしくみ』（飯田哲也監修、池田書店）など、わかりやすい本を手にとりエネルギーについて勉強したり、原発にNOを示す市民運動に参加するところから始めました。

●

原発の廃止を国民投票で決めたスウェーデンをはじめヨーロッパ各国等では、自然エネルギー普及のため、発送電の分離や電力市場の自由化、地域分散型電力網（スマートグリッド）の導入が進み、電力も消費者の選択が反映されるべきものだという意識があります。今の日本の仕組みでは、一般家庭だとその地域を管轄する電力会社と契約して電力の供給を受けるしかなく、どんな発電方式の電気を使うか、選ぶことができません。政治や電力会社が設けてきた、自然エネルギー普及を妨げる規制を取り払い、新しい仕組みをつくり上げる必要があります。

●

しかし、この日本の現行制度の下でも、自分たちの「エネルギー選択の意思」を示そうという個人や地域が少しずつ増えてきています。市民が少額の出資をして、太陽光や風力・小水力発電などの自然エネルギー事業を運営し、エネルギーの地産地消を目指す動き。耕作放棄地を使った大規模太陽光・風力発電や地熱・波力発電等、可能性に満ちた自然エネルギー開発や、電力自給100％を目指す地方自治体の取り組みがあります。

●

原発に代わるエネルギーを市民が「選びとる」ことのできる社会を実現することは、子どもたちに放射能に汚染された地球という未来を手渡してしまった私たち大人が、すべての子どもたちのために、どうしてもしなくてはならないことだと感じています。原発を止める、つくらせない、輸出させないという運動を継続すると共に、エネルギーの消費者・生活者としての私が、今、示すことのできる「意思」の形を探し続けたいと思っています。

札幌YWCA　清田悦子

種

大水がわたしを襲って喉に達する。
深淵に呑み込まれ、水草が頭に絡みつく。
（ヨナ書2章6節）

「パクリ、ヨナは大きな魚に呑み込まれてしまいます」。神の言葉を取り次ぐ預言者ヨナは、荒廃しきったニネベの町を滅ぼすと神が言っておられることを告げる役を仰せつかり、船に逃げ込みますが、大風に遭遇。厄払いのため海に投げ込まれてしまった3日3晩の祈りがこの箇所です。「お前は自分で労することも育てることもなく、一夜にして生じ、一夜にして滅びたこのとうごまの木をさえ、惜しんでいる。それならば、どうしてわたしがこの大いなる都ニネベを惜しまずにいられるだろうか。そこには十二万人以上の、右も左もわきまえぬ人間と、無数の家畜とがいるのだから」という主の言葉に心打たれる、たった4ページのヨナの物語を絵本で馴染んだ方もいらっしゃるでしょう。

メソポタミア地方を風土としている旧約聖書は、人類の危機を洪水で譬えましたが、昨年は、洪水はわが魂に及び、核の恐怖が扉を開けて私たちの日常生活を襲いました。大江健三郎が1973年に刊行した『洪水はわが魂に及び』は、世間に背を向け核避難所（シェルター）に息子とともに引きこもりつつ自然と交感する主人公が、「自由航海団」を名乗る若者たちと互いに影響を与えつつ破局へと進んでいく物語です。ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』からゾシマ長老の説教―青年よ、祈りを忘れてはいけない。祈りをあげるたびに、それが誠実なものでさえあれば、新しい感情がひらめき、その感情にはこれまで知らなかった新しい思想が含まれていて、それが新たにまた激励してくれるだろう。そして、祈りが教育にほかならぬことを理解できるのだ―が引用されています。誠実に祈り、思うことが新たな感情と新たな思想を育むことを教えています。

杉村みどり
日本YWCA運営委員

エンパワーするNGO

YWCA

「YWCA人材リスト」を活用して3つの講座開催

浦和YWCA

2011年3月11日、大津波にのみこまれていく命・放射能の恐怖にさらされている命・悲しみ・苦悩・理由のない犠牲・予期せぬ災害…。微力な浦和YWCAができることは何かを検討の末、地域の方々に呼びかける公開講座の企画がまとまり、講師に「YWCA人材リスト」を活用して3つの講座を開催しました。

最初は、8月1日(月)、参加型講習会「防災は日頃の準備から」では、講師の池上三喜子さん(東京YWCA)から、サラダ油とティッシュペーパーをつかった“ほのぼのあかり”づくりや、緊急時の携帯電話による連絡方法“171(イナイ)”を学び実習をしました。「早速我家の救急袋に、メモを備えて用意した」と参加者からのお礼の電話もあり、大好評でした。

2度目は、9月から12月まで3回にわたり「原発を考える連続勉強会」を開催。講師の藤原玲子さん(静岡YWCA)からパワーポイントを駆使しての説明をお聞きしました。外部からの取材もあり、「原発と政財界との癒着がわかった」「廃炉もビジネスとかかわっていたとは驚く」との参加者からの発言がありました。後日「初めて“原発いらないパレード”に参加した」と、行動に移された方もありました。

3度目は、チラシや広報についてノウハウを学びたいという要望があり、12月2日(金)「効果的なチラシの作り方」を実施しました。講師の藤谷佐斗子さん(日本YWCA広報・ファンドレイジング委員会委員長)から「活動を強くアピールするには、現状の分析・明確な目標の設定が大前提である」という指摘に、胸を憑かれる思いがしました。これらの企画を通して多くの気づきを得ました。

浦和YWCA会長　松本京子

STOP!　原発震災

静岡YWCA

2011年10月「原発震災を防ぐ全国署名」が100万筆に達しました。これは巨大地震が想定される地域での原子力発電所の運転停止を求めるものですが、予想される東海地震の岩盤上に位置する中部電力浜岡原子力発電所の停止を目標としているものでもあります。

静岡YWCAは、2009年にプルサーマルのためのMOX燃料が浜岡原発に導入されたのを機に、この署名活動の呼びかけ団体に加わり、各地域のYWCAからもたくさんのご協力をいただきながら活動を進めてまいりました。署名運動は地味ではありますが、対話を通して平和で安全な環境を次世代を担う子どもに残したいという思いを伝える機会となっていると思っています。

私たちは、創立4年後の1984年より、ほぼ毎年広島の原爆被爆者の絵画展を行っていますが、原爆も原発も「非核」の視点に立つとき決して保有してはならないという認識ゆえです。

今年度は3月11日の東京電力福島第一原子力発電所事故の衝撃から、チェルノブイリ事故後の、強制退去を命じられた村を舞台とする映画「アレクセイと泉」の上映会と本橋成一監督講演会を行い、8月のピースフェスティバルでは、広島の絵画とチェルノブイリの子どもの描いた絵、原発による環境汚染の自作絵図、六ヶ所村再処理工場「カオスの村六ヶ所」の写真等の展示とその写真家岩田雅一さん(日本キリスト教団八戸北伝道所牧師)の講演を行って市民へのアピールをしました。

11月には静岡女性の会連絡会が開いた「市長・女性市議と語る会」での発言募集に手を挙げ、市政を脱原発の方向に、また市議会での浜岡原発永久停止決議の要請をしました。

12月恒例の「サンタの行進」では、今年は静岡市九条の会連絡会と合同行動とし、「原発は原爆と同じ」との思いを師走、週末の街行く人々に呼びかけました。

前首相の指示で浜岡原発は停止していますが、中部電力は来年度再稼働を発表しており、気は抜けません。県知事・中部電力社長宛の「STOP! 原発震災はまおかキャンペーン」(浜岡原発を考える静岡ネットワーク呼びかけ団体)へと署名活動を移行し、「さよなら原発1000万人署名」(脱原発1000万人アクション賛同表明)と合わせ、静岡YWCAの身の丈に合ったこの小さな活動を続けていきたいと思っています。

静岡YWCA会長　黒沼由利子

ご協力ありがとうございます

賛助費
阿部有三　石原清美
一色義子　岩崎俊夫　伊藤真智子
笈川光郎　川尻泰子　岡野フミ子
北　彩乃　小林多美　黒沼ヒロエ
小峯祥子　斎藤喜子　澤田みさを
白井裕子　玉生邦子　柴沼喜久子
辻井夏子　渡辺聰子　中山美津江
永吉敞子　西尾　操　山本貴美子
西島　黎　水上伸子　渡辺寿美子
湊　晶子　宮内貞子　松原恵美子
村松幸子　吉田瑠都　浦和YWCA

世界YWCA賛助費
斎藤喜子

活動支援サポーター
江副史子　斎藤喜子　赤石めぐみ
鈴木　榮　手島千景　山本貴美子
長堀淑子　学校法人女子学院
フェリス女学院中学校高等学校ホワイトボックス
日韓ユース・カンファレンス有志一同

多文化共生サポーター
〈国際協力募金〉
村松幸子　手宮幼稚園
福島YWCA　浦和YWCA
〈パレスチナの女性と子ども支援〉
浦和YWCA
〈オリーブの木キャンペーン募金〉
雨宮慶子　葉袋洋子　黒田ミサ子
熊江雅子　斎藤喜子　添野ふみ子
手島千景　寺嶋公子
レイチェル・スマイル・ボックス
東京YWCA聖書を読む会
福島YWCA　新潟YWCA
沖縄YWCA
〈パキスタン洪水・タイ洪水被災者支援〉
ソリハ・ヌール・ヒダヤティ
花井絢子　藤田恭子　宮治陽子
矢次長子　福島YWCA
新潟YWCA　甲府YWCA
東京YWCA「留学生の母親」運動
横浜YWCA
〈変革の力基金〉福島YWCA

若い女性育成サポーター
斎藤喜子

〈平和教育資金〉
福島YWCA

クリスマス献金
鹿野幸枝　石井摩耶子
女子聖学院中学校・高等学校
女子聖学院PTA
日本基督教団松沢教会婦人会
手宮幼稚園　浜松YWCA
福島YWCA　浦和YWCA
(2011年12月20日現在　敬称略)

＊被災者支援募金に関しては次号に掲載します。

発行所 財団法人日本YWCA
〒102-0074 東京都千代田区九段南4-8-8
Tel. 03・3264・0661
office-japan@ywca.or.jp

【駿河台オフィス】
〒101-0062 千代田区神田駿河台1-8-11
東京YWCA会館302号室
Tel. 03・3292・6121/FAX 03・3292・6122

編集発行人 鈴木伶子
振替 00170-7-23723(毎月1日発行)
定価1部 150円
年間購読料 1,260円(送料込)